北條五代記　巻九

G 29
777

G29/777

東京帝國大學圖書印
B 34229

北條五代記巻第九之目録

三浦介道寸父子滅亡の事
双紙一部を人数多あつめ記事 付 平巻の事
関東侍天下に望をかくる事
関東の乱波智略の事
戦船を海賊といひならはし事
人名題号に志るする事
関八州の外に大小ある事

南葵文庫
000282899

北條五代記巻第九

一　三浦介道寸父子滅亡の事

聞しは昔、相州の住人三浦介、受領陸奥守従四位下平義同、法名道寸と号す。子息荒次郎弾正少弼義意と云て、父子名をえたる侍なり。是ハ大介義明の後胤なり。平治の合戦よりこのかた三浦荒次郎義澄ハ源氏にくみして度々軍せし事、古記に見えたり。然に伊豆の国に伊勢新九郎平氏茂と云武士あり。後には入道し、北條早雲と号す。此早雲、相

摸小田原の城を明應の比かいの門より上杉朝
良居城同國大庭の城とも責おとし永正元
年九月早雲と管領上杉朝良は立川にて大合戦あり三
浦介道寸ハ相摸岡崎の城によりて早雲とりて
かへしかけハまけて同九年八月十三日城を開
退し同じくみうらの城に籠り年久しく海敵
をふせぐ鎌倉合戦に道寸討負敗北せられ
しも秋谷の大ぜい追かけさへぎりしかハ高山
にげのびて海中へ行岸にあがり一騎うちな
りいく万騎といへどふせぎかなひがたし。總じて早

雲大軍にて小坪秋谷長坂黒石佐原山を打
越みうらへ道寸まけれバ父子一所に雑兵二千ばかり
にて三浦新井の城に籠て籠城す此城南西北ハ
へ海白波立て岸をあらひ山高く巌石そばだち
て嶮もけハしかりし。城の廣さハ二十町四方。東
一方のみ二十間程陸つゞきにて堀を掘門一ツ
立をかれたり。然は八百万騎むかふといふとも力ぜめにハ成
がたし。是名城也。道寸ハ至剛智謀兼備せし。
大将なりといへど。鎌倉合戦に人数をことごとく討
まけ小勢なれバかなハずして三年籠城を保り

千騎矢倉と号し、大さかなる岩窟あり。是より常に
米穀を千騎にとりて、只今の内も籠らしめて、兵粮
米つきたりとてもかまはずまでも城中の者は難儀なりと
いふところに武蔵の国司として、上杉修理大夫顕定は
江戸の城を居住とせし。新井の城中、兵粮にこまり
と聞、武州勢を率し、道寸後詰として、相模
の国中ごとくまで打越陣取、早雲此よしを聞
新井の城おさへとして二千余騎残しおき、宗瑞父子の
人数、新井を退て、玉縄の手前より陣取、合戦し。
然るところに上杉方へ武

州へ相引込ければ、新井城中の者ども力をうしなひ、入
道父子は切て出、討死すべきとて、腹を切べきとせんぎし
けるに、大森越後守をはじめ、佐保田河内同彦四郎、三
浦の家人等、総州真里谷上総介殿は、道寸次郎殿
の由しと。親子の奥縁也。箱根にはさこそおほく
の者ども、上総の国へ移し、下総武州上州勢
勢とりより州し、上杉殿と兵衛、相模の国へ乱入
て早雲を退治し、本懐を遂べしとぞ
せんぎありけるに、道寸是をきゝて、滅をなさん
ことくにて和神妙也、然るに上杉殿

親が男から。時高が養子と成て。三浦へ移りて後
継母に男子一人出来たり。継母の讒言によりて男子
を世にたてんため。これを害せんとせしかば。
我身うくおもひ出家し。世を遁れ。小田原総世
寺にありしに。家中の者ども悉くきたりて。味
方となる。小田原の城主。大森筑前守加勢をこひ。父
の城にありしを。明応三年九月廿三日にせめ
おとし。中村民部をはじめおほくをころしけり。
是因果と方にむくひ。終に月にかはりて敵の
せめをうけつ。道寸ひとへに義父の罰とおもへり。天の

せめを蒙る。世にもかくもうしもなし。さればかく
とて終には滅びぬべし。落まつりし時も頼むかひなし。
たとへさもあらば死べきにあらず。死ざれば後代
の恥辱なり。いかでか東方朝が九千
歳。うらしまが八万余歳浦嶋が七百余歳も限あるに
みな終にはむなしくなりぬ。我六十歳をこえ
ぬ。ともかくも今生の名残をしとなり。酒を献
ひたるべし。今生の名残をしとなり。酒と敵
ひかへ道寸盃をひかへ。河内守。君が代ハ無
にや。代とうたふ。荒次郎扇をとりて

君が代を千世にや千代をしやしらば現の
うちの義のそのうれど舞姫へば花山卿も同く
高く流まて主よ笑われなき一曲一ろがでいろの
世よくは高吻ら文もわりひなん事なし称ば於りひ
切とは、ひかれしとを最期の舞の袖ぞ風ふう
また哀なるは道す諸侍に向ていちく君後の礼
義経本の忠功わうろしども従と云へ共兄弟が運命
もれさもて三年の籠城に兵粮つきはてまたぶ力なく
しぶ城中にを落んとおりふ人わしばば降人と成て出
城すべし。我すがも恨ともなし。死せんと云ふ人は討

死し後代に名をとどめよ。道す父子は腹切べし。生
涯の対面も是までなり。諸侍是をきくこは口惜
さ作なれそれ人の一大事こはいふ二打の後をと
りそせり。年は日本恩禄を請ろく故別よりかく
らば豈仁乃なかれん。白氏文集に君恩無窮の
おとしとよへ旧君の深恩を忘れさ一大事を遁
世よ生残りて恥とさししも君やいへさこ極こも
ふ討死し名を後代よこいうんは弓矢とる身の
面目なりとせんれば諸卒是を聞善よ
くはそうらこうとのく心ざしを一所に討死扱さど

門をひらき切て出るぞすうちへせとかゝ後幸丸を
いさめんふと最期の合戦なれば父討れ丸子助右
けるぞ見ごとなれ若落合も刀の流の
くろがねを限り死を限りて天地をひゞうて
ふる修羅道もかく虎ん。道すうちれ
どうて下知しるふ雨よ禄谷雉子丸を名
乗る。道すと目がけ地舞し。ある上りてとて
なべてむどくむこのすへ千ゆう大力まく。
捕とをせむ海底さしさて流むせや。我身
みて見ぐうせんまて。焔魔の眺のようて入

小せいや難の前勝まを付かそ首禄ちだ
切捨らまてら討死したかさを中お禄谷
雉子以いんをうしなやろうぞ千ろ兄よう
ろうぞ十三を一期として死て名誉をとどめる
口とかめ以へしそなうろうれ蔵次郎入道
ふ深さる主代々尺八寸の正宗の大太刀とは
き物く大数と立切てまゐる根。鬼神
のあらし忽へと門流めぐしこへせあるしせぐらひ
きりをひらけざりけさぐけ。死切様なきろ
かく行まりさ云とものよ散くよ切てまかれたぞ。

かくきの勢ハ宮方へまいりけるてゆきに敵こそ
なかりけれ。敵味方死骸ハ息上に塚をなさ。血ハ
野草をそめ。味方もおほく討死し。生残る
者ハ悉く腹を切てぞ死たりける。
さげがに残る人〳〵ハいづれも腹きらんと自害
さりし城に残り七十余人ひとつひとつに腹切て。
おる一枕よりにならびあへと伴へやとし上仁
ともなる者ハ忠臣とぞいはんさるとき者ハやとし
くも死をのがれ。智なき者ハ時の変を弁ぜ
ずして道ひらかざる者ハおかかりける世すぞかし

末世なりといへども。関東侍ハ智仁勇をかね
道をよく弓矢の道にくはしくして。譜代相
伝の物にして年来の芳恩を謝し。城
中の侍一人も生残らず義を守り名を
垂れ命を一塵よりも軽じ潔よく
討死せし事。まことに忠臣なる哉
次郎いまだ父もとに紀れ自害するべし。
甚次郎ハ一人江の残りてまかりたらバ
合戦仕りぬとなりなれバ小壱しも尸を
戦場にさらし苺の下に埋れ名を万天

かれくへしこそやすからね又道寸ハ若年より和
哥をこのみし故にかくれなし辞世のごとく生
害し給ふ
うちのこるものも討をかけて者もかゝりけるゆ
へ後ハいづれものこらず切腹し給ひぬ
ひめ荒次郎ハ廿一歳器量骨柄人にすぐ
れ長七尺五寸黒髭あつて血眼なり筋
の筋骨たくましくして八十五人が力をもつて
せさいごの合戦の手柄おぼしめし立たる甲
冑の鍬形をこひわつさ二分のべ是を常に

白樫の丸木を一丈二尺に切て八角にけ
づり筋がねをわたし是を引さげ立出門外
に出ゆき出てむかふ敵を振廻しやらせんの頭
おちさりぬれば泰山もさけ川まで海にへ
らんとしもあらく惣にて沈がちにしば方へ
近よる者をば甲の頭上をとぞ
ふるひける胴へあてへ横手にてべ一掛に
又十人打ひしぐ雑兵あはれる死たる者又
百余人あまり地にみちて是の手ものなし
それより後は門にこもり鬼のごとくにかゝりける

此國に皆敗れして。敵もおそれをなしつゝ首を
かき落し。死たりけるが、されたる首は死せども眼は
さらさぬによりけ。鬼神は汁をすゝりけるがごとく。
牙をならしむら。是を見たる眼のひらき首を
ひろ流れ血をそゝぎ死するがごとく。さもおそろ
しき目見てぬる者なく、まつわれば此頸人も見る
人なし。是によりて。天下の貴僧高僧に仰く。
其しの大法秘法を祈せられたれどもしるしなし。
三年此首死せず。小田原久野の總世寺の禪師
其首の前を御しける

らはこそ爰やとをてね一禍あり。浮世のひ
ぬとおもけがのて亡どもとて白骨へは眼なき
がり。其ちまち肉くらて皆らへと成ね。此慈
か次郎死骸の有し里。百万空万は今にをそて田
畠なも作らせと。其よそもかゝもて牛馬を中に
へて其ともの。ば。そちまちに死をたに献を
もよく知く。是を中へへ事なし。是によて其よ
おうくと生まり。当代のさて、ひ成。新井乃
城を見捨せしりし。道寸父子は。名誉乃武士に礼
さく。城の大手古城の外まて下るし。礼敬と

氏合戦とハ。七月十一日なり。今も七月十一日に
は。毎年新井の城に。雲霧おゝひて。白の
光もさだかならねど。丑寅の方と。未申の方より
雷電ゝやき出て。両方の光へ乱れ。風猛火
を吹上。光の中に。矢叫矢軍の音きこえて。干戈
とみえし。鹿毛よ兵馬も走散へ乱れ。天地を
ひゞかしける様。おそろしきとも云ばかり
なし。かゝるゆへに此城のあたりハ。人家もな
し。三里ばかりハ草茫々として村里見えず。扨又
不思議の事なり。道寸父子の討死ハ。永正十
五年戊寅の年。七月十一日の寅の刻也。然に
北條氏政の切腹ハ。天正十八年庚寅の年。七月十一日
寅の刻なり。七十三年に当て年月日刻。たがハ
ず果報ひきたる。因果のことわりこそおそろしけれ
それ父祖の善悪ハかならず子孫におよぶといへ
る事。古人の金言おもひあたれり。此すてさ
の次第。三浦の老人物語とぞ。おもへば記し置者也
○双紙一部とハ。人數多き記も事。付平泰時朝
也とハ今。世乃の例として。人の語り伝へ。和漢の
これかりて。いまハ保元平治の頃より。世乱れ出源

平合戦の次第を記したる大部の文は多く
見ゆれどもそれら是は一人ならで世の人口を書とも
多れを取りてつゞく。古き文なれども是かれと事
をへの文様にて変じて私意をとく又頭をかざるまじ。
真をとりうしなひ世上の風俗をかりしろく書ものぞされ
ただ前後のさまの事も一様にならしもぞ又かのまれ
子人年ごとの一生涯を一巻の内に二流三流記せり。実
流は一つかしではたまじなれたる事なれば流の
されば多流と書をさしそむる撥又東鏡は頼朝公
以来鎌倉将軍家の子細を記せり。此文一人して

老てども将軍数代相続し。天下の事と鎌倉に
て沙汰せし事をおよびて。右筆見えたるために。年
号月日時刻迄も毎月記し置たるを十二帖を
一部として。東鏡と号すといへど。此文にいては虚言を
まじへとはぼくそくらに盛衰記。平家物
語太平記などは東鏡に相違のことあれども。それ
むかしよりいひならはしたることなれば。慶長
年中家康公是を見出しましてもてあそびたまふ
東鏡の抄書あり
夫人之處世也言行之善不善不可不記

要得一善記之則百世善其人、得一惡記之則百世惡其人、言行寔君子枢機也、可不慎乎、左氏記春秋而作万代亀鑑、得良史名者難矣哉、東鑑一書者自治承四年至文永三年八十七載之間、傍羅曲探以大抵記之、不知記者名、為遺臧久歴年代其名湮壞耶、深隠山林其名埋没耶、抑又謙退以不著其名耶、見此書則言行之善惡如指掌也、吾

大将軍源家康公治世之暇翫弄此書、見善悪爲要、見不善内自省也、凡人主所趣向、天下随之、如風草形影也、以東鑑名之者非無所由、殷以夏爲鑑、周以殷爲鑑、詩曰、殷鑑不遠在夏后世、今也刻梓以壽其傳後世、能見此書辨别淄澠、則非啻東州明鑑、豈不作四方鑑戒乎、書之以爲跋

慶長拾稔星集乙巳春三月日

前龍山見鹿苑承兌叟

右の文ハ文永三年ニ至るを記せり、これより慶長十年ニ至三百四年乃あひだハ、ほとんと隠逸の人へもと

記ども今様に刻でゝ後代の亀鑑に遍ねく
及ぶハ誰の其を信用せらるべき然に保元の合戦
此のかた父武に名を残しゝ人と数多書記せる中
おゐハ北條家九代の内武蔵守平泰時ハ希代の賢
人と知れたり世久静謐に治めし人ハ云道なる
金言多かりき貞永元年十二月廿八日泰時ハ
政の要として今に至りゆる代の法度を
尚平まと泰時見てゝ此式の上に殺べきと眼を
千人の者ハかて其規の礼を弁へさんや尤偖
守の推察に服るの中ぞさるて出羽前司民部

太史周防前司親実へ道中の宿也故三年に至而
ふ撰もて其を取り此事末代の為候ふべき由ひ
そうに滅じそうろ泰時式礼義と定りんじけれバぞ
の時代ふかゝれハ其の前の直なるやうくもはしく見
かゝりんぞされ尤今に至りても沙汰をさうなく同閏日
六九日早且定りいさゝかうつ廷上編に業の支に
継で其組後為そくくのる基継りて云定衆
の為に全き事なしと云て武蔵守を守りの給
ひわかのしらにぞれバ其定のよしもれどしと給
ひ久れバ

みかさの山と。よまのむかしけとこそ基俊卿の昔
侍文武の学びハ常也。然らしても哥なりとも
あそび給ひぬされバ右の発句ハ冬の発句。脇ハ雑也。
是はくびひしころや。連歌ハ昔より後世まで
玄隆にまかりしとありとへ発句の季と活て
脇ハ季を付。脇のてんの字も。物の名ふく
ごとしこと也。仁治二年三月十六日。泰時評定不
お為府にして後。廷前の落花をみて
事ちげたき。世のなかしひしくて物うくれ花の
敬なん。善もちてれもど御せりて謹ハ泰朝

とさしめ。鎌倉代々の将軍家の詠たりし。哥集あり
載らまてり。実朝公和哥をとりてあそびたまひ発出
泰時朝親。京都より鎌倉へ下知ありしも。実朝公教
哥を京都中将定家の朝臣へまいらせ。御哥
合点を加へ給しきとぞ。又詠哥の口傳一巻を献ず。
六義風體の事ぞめてなかなかにしてならず。又建仁三
年癸亥九月二日朝親京都より下着す。新古
今和哥集を持来る。是道具有家。定家。家隆。
雅経等の朝臣。勅定をうけて撰べる和哥なりといふ
て去三月十六日ふ。是を撰じ同四月に奏す。

いまにいたるまでもちゐられけれども又枕ことばの鈔也。
然ども将軍家和語をこのませたまふの上。故右大
将軍の和歌撰じ入らるゝのよし。申入るゝにつきて。おほやう
に和歌の道んざしありといへども。いまだ申さるゝ事
ありといへども然るに朝親だまつて定家の宿所
は岩窟のやうにたれこめ。則此集の作者にしたる
のみ。計略をめぐらし。書をもてあそびべきのよし。作文
めぐらすの折ふし将雅重忠などが事に付て。都鄙静
なしといへども。延引ありしを上として。実朝公
和歌の撰をなさしめられしかども。披露ありしかば。新古今に

奥儀のいたる所まで。はやく其夷ぞ書しめたまふ事にいたつて
葉の撰。右大将朝臣とは召せられ。此外作りしものせられさ
略しける也。梅を新勅撰。続古今。続拾遺。新後
撰。玉葉。続千載。続後拾遺。風雅。新千載。新続古
今。これらの集に朝臣の詠をもしるさしめ代々に撰者将軍
家の詠にかくれなくみえたり。わけて記しがたし。宗尊公
和歌を好びたまふ。合点のため民部卿へ。五百首。二百
首ならびにたくさんを記さる。定家相伝の口伝
かつ万葉集一巻を将軍家へ献ぜられ。此贈晩年
事なし。川辺の枕にあらんやのよし御座有。

宗尊公。弘長三ヶ年中の御詠。数巻の内となし
此。三百六十首をえらばれ。民部卿為家に。点を乞上
せ。則一巻の状とそへて。六義の奥旨ありと云。宗
尊公。建長五年より正嘉元年にいたるまでの御詠を
撰じ集られて。是を初心愚草と号せられし也。元
ていまだ東鏡の一書は記せし者の名をしるさず。元
長亮右小批判せられ。凡書の根源と為
なり。故に道の大膳大夫廣元始め依命の後。幕
府のことを執りの為。寿永元暦のころ。京都
より里則来らる。並書かしひよりまての訴状

洛中とよび。當郡小嵐以下は武家より是沙汰
して来る事共を記録せし。文治よりこのかた。所
家地頭下知の條々。式目。平氏合戦の時。京士
ゑんことしの次第の。領文書の文書あり。此要は
あらはして。右筆のかくりしつらの次第をよくして。
正しくするは敬生と。武蔵守以事とやらんは
末代の亀鑑なるべしと。李氏。浄圀全ら
よしてかと為集しめ。貞永元年十二月
又月目録としてのへ。泰時執権十九年治る
次第とかかりぬるへ。それより次々。将軍家の時代

を書つけ一部とし。[illegible]と号す。其文ひ
ろくして泰時[illegible]よりて。末代におよぶまで
ね。抑佛教衰微[illegible]事。聖徳太子よ
りこれをひろめられ。太子ハ救世観世音の
化身なれハまことにありがたき子細の
[illegible]しとぞ。夫釈尊四十九年の説
法ハそれぞれ一宗の法となりて。[illegible]
も[illegible]日域よりといて。八十宗になりて伝教も。
なかんづく弘法大師。傳教大師。法然上人。親鸞上人。
日蓮上人是等の人一宗を[illegible]

の佛来現と尊ぶことも教化を末代にいたるまで
悟りもひらく書物一部の文を宗とす
といて縁用もそのへ。他宗を法海にたとへて
釈迦の金言なれバ用ひず。経則ハ我納め末代よ
といて。わすれやすく佛法の説文に用るべからもなし。
抑又四書五経七書ハ唐国の文なれど日本にても
是をまなび経ても文さかんなる時ハ又王法も盛
なり。武をかくもる時ハ国家も饒ならず。されバ
文武ハ是天地のごとし。陰陽相生の時ハ人
病なし。故に釈儒の二文をもちひずんば

或ハ純化上人ときめし。或ハ文武に名をえて人多
きりき。然ル末世の亀鑑まらてまん。文ハ大ナリ。是故
終に權化の人。出世ナり給ふ所也。然るに貞永元年
壬辰八月八日泰時繼として五十一ケ條乃御成敗式
目ハ後代の明鏡ナり。肯相撲小田原北條家に式
目を鏡として関八州の擾を靜謐に治せられ
し。組光ハ總為公方以来亨ひ来る成りや。天下
乃成敗ハ式目乃外ハあるべしとおもひしか。是東
家康公ハ上洛の時名称出さる成法なの趣
條々

一 如右大将家以後代々公方之法式可奉仰之殊
損益而自江戸被出御目録者弥可守其旨事
一 各抱置之諸侍以下若為叛逆殺害人之由於
有之其届者互不可相拘事
一 右條々於相背輩者依法令糺明可被処罪科之嚴重之
法令者也仍如件
慶長十六年四月十二日とこそ
抑又東鑑ハ。東州乃明鑑のことなれど。豆宣方乃鑑
戒となさぐらんやとこそ。凡右乃二文ハ。武道身
為よくて。我朝万代の亀鑑なり。然るに泰時ハ世

に秀たる文武の達人は上古にもすくなかりしが

りしかば後世までもてはやす

○関東侍天下に望をかけし事

中ごろ関東は北條左京大夫平氏康公は

伊豆相模武蔵上総下総上野を治め常陸下野

駿河遠江へも手をかけ関八州に威をふるひ文武至

剛の名将なりしを氏康に敵對の人〻安房に里

見左馬頭義弘常陸に佐竹太郎義重下野に

宇都宮弥三郎国綱越後に長尾景虎甲斐に

武田源信玄駿河に今川義元東西南北に敵ありて

みちみち諸さふらひ義を守り節をかたくし名

をおしみ命を軽んじいくさすゝんで死をわすれ

討つゝ敵味方の骸骨地にさらし血は野草

をそめ鎗長矢さけびのこゑ震動しやむこと

なし然るに弘治二丙辰の年にあたつて氏

康信玄義元三人の中に和睦の事なりて氏

康の子息氏政は信玄の聟になり義元子

息氏真は氏康の聟となり信玄息義信は

義元の聟となりて三方へ和しけるに北條今川

武田のこ三家一味になりて氏康その子細三人

の大将に義ゆる出されしと見えたり。公庵よハ門主よ
天下よ望をとげ。そのうよかると聊るてら實
東将の先例をおりふゆへよや。おかわかる人も
天下よ目をとくる御よ義元。後。まで。怒。あれ
軍兵二万五千を引卒し駿府を打立京都
をせめ上る。尾州よへ諸勢打散て乱妨狼藉
義元ハ桶狭間よて酒りのしまよ。所よ織田三郎
信長六七百の人数よてせめかゝり。味方よま
なんでとしせ。尾張国でんがくがくぼと云所
ありし永禄三年庚申五月十九日義元は信

長のためよかろびし門八年五月十九日公方光源
院義輝公ハ三好が為よ御生害也。三好修理亮
子息左京大夫天下を二代持。後よ信長義昭尾
張伊勢三ケ国の勢を引卒し。京都へせめ上り。
同十一年十月十八日入洛も。是ハ後公方義昭
公。てさび松永しのよ。同十二年よ。三好ハ信長よ誅
せられ民康ハ元亀元年十月二日病死。民義ハ
伯父信玄が遊出せられて後卒も。太郎義信ハ
父信玄よころされ。信玄ハ天正元年正月十二日よ
病死も。輝虎ハ同六年三月十三日ニ頓死也。

同年の春上杉三郎景虎ハ、喜平次景
勝とあらそひて自害せしめぬ。されバ氏康。信玄。謙信
此三人の内二人ハ存命にあらずして信玄滅亡しける
故さらに信長天運に叶ひし紀なきと。諸人沙汰
せり同十年三月十一日武田勝頼同太郎信勝
父子ハ信長公のためにほろび。同年六月二日信長
公三位中将信忠父子ハ明智日向守光秀がために
滅亡し同月十三日光秀ハ羽柴筑前守秀吉
に討れぬ柴田修理亮勝家ハ織田三七信孝を主人
と秀吉のために誅せられしより後京乱をさまり

同十八年七月十一日氏政ハ秀吉公のために
切腹し。氏直ハ高野山に入文禄元年十一月
四日卒逝す。関白秀次公ハ文禄四年七月十
五日高野山にをいて大閤のために切腹し。義
照公ハ慶長二年八月廿八日薨し給ひぬ秀吉
公ハ同三年八月十八日に他界也。豊光永禄之
中に生れてよりこのかた天下を治給ふといへ
ども大名高位を給ひしかば二十二人。此内十六人
ハ戦死して卒し七人ハ病死なり。扨又右の
内八人ハ果報めぐりて天下に義兵をかかげ。武

躾の法に付語りあり。されども内者へハ弓矢をもて
果語ひぬとくされバ、武人やすてやしされたるハ。論
語に人生とさおんだちもたくさこさんハ。不逞
さ持わりと云ふ。一生の君方便なきぞ思意
なれ共、かなしきかな一日片時の内にも禍なし
し人あるもかれさる根。たとへバ友の蝉。時知り
ながらかかなくとうしろうは蟷螂抱さんとも。在又
いかでかを守る。木の下によつて弓をもつ
て射んとする。是ハ深き谷ありとも知らず
力をわすれぬ。皆ぞ、まへの理を知らずして後

の音を立つり見とどこおんせしらしが云とこうしもと
おりひし候ぞかし

○関東の乱波智略の事

見しは昔。関東諸国みだれ弓箭をとりて年
ひさしく治まらずして、くせ者おほく
有し。是等の者、盗人にかくれ、盗人にもあら
ずして、世をわたる事かなはず、知恵才覚有る者也。
或文に乱波と記せり。但正字たしかならず。俗
にはらつぱとぞいふ。されば、右の者を国大名扶
持し給ひぬ。是ハいかなる子細ぞといへば、乱

他ノ国よりきたる盗人とも。よく穿鑿し。おなじ
て首を切。そのうへ他国へ逃しは。山賊海賊を
討強盗して物を取事が上手也才智ある
て。謀計調略をめぐらしも事。凡慮に及ばず
古語に。狼くも賢とまれびんを。賢ともとも
いへり。されば智者と盗人の相かなはず事也。舎利
弗も智恵をもつてねらはれたると。
ある文にみえて。それ孔波と号も。かの名そか
これ武士の智謀計策をめぐらし。他国を切て
取をなし。又戴渕と云者盗人也陸機と

云者あり。其名は則長安へある時。渕をうろくしとめぐらし
陸機が舟のうちを。盗とらんとせし。陸がいはく
汝が器量才覚なくば。高位にもすゝむべき人
なり。何とて盗をするやと云時。渕此言を
うけすて盗の心をあらためる。帝此由を
志とひろかへと事切也とかへりてびらく悦て
あげて将軍になし給ひね。是をおもふに
誠に関東のちかもが智恵なくば。神仏と
なるんも安かるべし。大人なりとも。財宝
ともたくはへども。盗人業をえやすることを

絶えたれ。然るに北條左京大夫平氏直ハ實
八州に威をふるひ。隣國皆歎くるよしにて。
やまうひなん事なし。武田四郎勝頼
太郎信勝父子。天正九年の秋。信濃。甲
斐。駿河三ヶ國の勢をひきゐ。駿河三枚
橋へ打出。黄瀬川の難所をへだてゝ。陣取
る浮嶋が原に陣どる。氏直も関八州の軍兵
を率し。伊豆のまろ山がもと三嶋に陣をとる。氏
直乱波二百人扶持しけるの中。その一の悪者あり
名を風魔と云。たとへば西天竺九十六人の中。一の
くせ者と外道とそなへかし。此風魔が同類の
中。四頭わり。山賊海賊。強盗窃盗の二盗有。
山海の二賊とは山賊は山に住し。強盗ハしきいに
と押破りて入。窃盗ハかぎをそろへ人を知ずして
上り。此四盗ら夜討をとりて分一と号し。此二百
人の徒黨四手に分て。夜の降雨もいとはず
雨も風の吹くしも吹ぬ雨も黄瀬川の大河
を物ともせず打渡て。勝頼の陣所へ夜入り
あひへ人を生捕にし。馬の綱を切。ここかし
こに火をかけ。うち入て夜討して。分捕乱捕し。

わまけさへ急ぎしこへ火をかけ。定方へ亡へ。味
方にまかせんで終に退へて。鬨声をあぐれば。
無陣さはぎ動揺し。ものゝぐ一ッ甲やうに。二三
人の外付ワがよへをひ引かひ。わもそかくぬさ
ちしまと出るとひへれ。前後にぬしひ。味方のむち
ぬと敵ぞとなりひ。討つうちれけ火とちしし。
算を乱して半死半生になちくうひ。敵ぬそ
首と実検ともと。いかに同士軍して。敵方の主
とうち子が親の首と知れすまの面目なさよ。
鑑とさうさ後と会釈の旅のあがる人もそ

むかうらかれ様又もかかりしてゆへ。切十人計
かくさもしかくれたこぞり居そうりしが。かくても
生きひるべきもと。腹を切らんとしふ所に。一
人まうさて云ふは。狭く死そうたり。主従
討親と殺とをむくひと謝せむとんだ。又逆八
逆乃罪のかべしもと。二百人の悪盗とは。など
主と分てそしさせんや。凡大乱時乃天
物也。命を捨べれと討死安うるべし。今宵
も夜討まきるべしがきっかまちるに待て。
ちりぐにかくみぐ時。も中へ後より行

末ハ皆一所に集るべし。それ風广ハ二百人
の中にすぐれたる大男。長七尺二寸
手足の筋骨あらく爰かしこに村ぶ
有て、眼ハさかさまにさけ。黒髭多く口脇まで
広くさけ。さし出たる牙四ツ外へ出たり。かしらハ
福禄寿に似く。鼻たかし。声をたつる時ハ出
せじ。五十町ひびき、ひそかにいふ時ハからびたる
しるそて鳥ありて見まがふ事ハなき程ぞとよ。
此時風广を見出しいどくんでさしち
がへし生の仇ぞと、ほしいまま怨念の一味

すでに亡君亡親へ黄泉のみちへいふふせんとぞ。
あれしが為の道節ハ十人ありしとてゆゑにて。
草木みなしてじつにおはる風广例の秘計し
て数ヶ所にかくれおはしける時の十人の者たちにも中へ
彼ぞ是へ行末ハ二百人へみな一所に集まる。
然るに秘計強盗して彼の時立もどり振す
ぐりとりて事ある明松をとりし。約束の奏
ども出す。諸人同時に立乱して振る。是
も欲しまかれへなるとぞえらび出さんとて死
の謀なり。然に件の立もどりて振もどり

よしなる事によ。敵陣へなかる十人の者わたして
武義を立てしとて。それ出されみかたへかへされる
そなびんなれ。敵の事なれば勝敗の諸
勢見るにくらびよ敵のくれば。よろしくともなき
すて。昼猟するあひだなる後老覚なるの
いひしたいかりや人くして共に船にてよせばおつ唐
にてそみで。ちとやいふ兵書の云葉を知る
まつや。此の山陰に。その野辺に鳥の飛ぶみ
る。そとがうかがひにれず風广が思ひ。乱波が巻
ふかうしそうよ。おうしびめぐまへばよとや

さうる道をも討されとて。鼓陣鼓さ動乱しもろ馳
向くもととんてうり。人一人ともなし。くられば馬に
くるとさひう。合弓と矢と。とげ鉄炮に火縄
ともに。干戈を枕とし。甲冑を志もつて
しばし。秋二月にもわたしりひのへの風广が
遊びや。かの頃のらんもから敵討やさいひし
事。天正十八寅の年までなたるが。今は国お
さまり目出度時代なれば。風广がしりはさ。乱波
が名さへ関東にうち絶えてなり
○戦船と。海賊とひとしなしはぜし事。

凡しへむかし北條氏直と里見義弘の時
節相模安房両国のあはひ海へだてゝ。舟の渡
海近しければ敵も味方も兵船にのりて。
みだりにあらそハんとせし。されバ武州を
小船一艘二艘ハなく。ともに来て。濱辺の
里をさハがし。武州ハ五十艘三十艘渡海し浦
里を放火し。女わらべを生捕。即刻船中
へ海も嶋崎などの在家の者ハくら
くもがくし。敵方へ貢米を運送して
と号し。我とん安く居住せバ生捕の男

女をバ見おの者。敵方へ内通して。賞をもらふ
我よりいれバ敵も味方も海賊や渡海せんと浦
里の者ハおそれまどひて用心をなし。海賊の沙汰日
夜やむ事なし。今ハ諸国治まり天下泰平の海
表浪の上までもおだやかにして静なる時代也。
扨兵船に乗て江戸川をこえたと記録にある
人いくさ舟の争ひを海賊の者と云れども
中の一人ハ云篡などからくいとくむかり
山賊海賊といふ事ハ山にても盗をなし舟に
てはもとぬすむと名付たり。文字よもえし

侍なるものゝ盗をする者をさして海賊といふ云侍
ぬるは無事なる抱ともしらぬ者なりといふるは
者どもにて我文盲ゆへ文字しらぬもしらず根本の
侍の名をけがす事は上にいへる事と云時は侍の
無益に侍り。無云も無礼無礼とや文字に
見をさけば侍どもかくのもとはかれ也。又いふ
し人より。海賊と俗にいひ侍へるればふかも知る也。
今おもひあはせて此名をとらずふかく安堵すべし
それくろかもしさにして其名ある。扇船人。
廻船人。海人。漁する水主。梶取なども

いくさ舟の侍とて兵船或者たる戦船侍れどいひ侍べるを。
いまはやすむかしどんと海賊の津海多のなしげども
それば人やさて兵船と海賊とてふかくとかく侍らじ。
是れ此賊の字をかんとするは盗をとがむるわかち
ふ抱れざるに限るべしともし悪事とさして又
其押名なるべし。此城籠城なるをとり師と又
軽がるしくはいへ源平此をしひと計しとさ
みるにも平家の西賊おを討もし。源家の賊
徒を追討しなせし。敵をさして賊と名付た
是それぬとも子細は屋まし抱よたくへて。

弁まもなく詠ずれバ、すべて弓馬の道ハ武略
とあるともそしんをもつて号するに盗賊と武
略の文字かハりぬ。みちこそかハれ心ハおなじ。それハ
うおとつてかまへて盗とするも武略もみなよるも
あとをとりて肝要とせうるをとらる戦場にとゞいて我
是相剋相生の五行とうんぬん勝くちを向ひ。我ハ
孤虚王相とく日をえらび時をえらく。孤来て去
ゆうしと没せんとけれとも時ハ味方敵の大将ので
みずてをもつて。ぞ行のかすしね極まこかするらち
調略とも。是ともそをせしめた。謀を偽ともいへり。更

と偽兵と偽城とをせしむる。是ハ我の計策皆兵道
の外の武略なり。凡よ才一に謀とうつしとなる
是かなく久しく戦ハずして勝事をとるハ敵の兵の
屈するやうにと智計とめぐらし横術をして
利をとらしかとも皆の名なりとも。是孫子が心
なり。掛又の成敗式目に山賊海賊おの事
と记せり。是れハ人と殺と若他と計る
て。是科の程度ありしかにさとも又強窃
二盗のかハ治わり。強盗ハ日中の盗人。威力を
もて人の財宝とうしむひおはせりさうハ秘事

盗人なり。是ハ威力なく、ひそかに人の物を盗
む名付くかりそめにも。しのびといふと記せり。
竊盗の二字を、ぬすびと、しのびと、ひそかにぬすと
もよみ、そのさまを取れバ、わすれず名付られども。
盗人といへバ悪逆無道のものゝやうにかぞへられど
いへども、是ばかりかハ。又花鳥風月によそへて。
盗のことぞと依せり。風ハ花の色をさそふかぜ。
風賊なり。露ハ月の影をとるといへバ露賊なり。
香ハ窓によこれて立ばや、香賊と申とも、和哥に
詠せり。其上、仏ハ眼耳鼻舌身意、是

と六賊と説きおかれたり。凡三毒ハ鼻から色声香味
身よりおこるものなり。其事皆賊也。六根六塵六識
三六十八の煩悩、是と仏ハ盗人妄想煩悩
なども。極く是名を付給へり。此欲賊ハ人
あるに付きそひまとふものなし。されバ色とわざくらし
色にならぬものに古人ハ万法一心にとどくとて禅家
ふとハ、一千七百の公案といふものさたりなれど
なるとりて、禅の一法ハ一切諸法を備へ
思へば、生死の去来を知り給ふなり。生死
不可得の生死。死又不可得の死なり。然れバ

生にまよふ物。死ハ死にまよふ也。生死にまよハずして。是
はなれざる。是一念不生の所なり。是ぞ即心即
仏にして。外に仏をもとむべからず。又は無相
ありのまゝ無識なし。此名色の二相と分明なるべし。
一切の境界みなその外にあらずして。ぬけいづるは無識。さとる
時ハ万事をもつて一物なし。人各一生涯名欲に
着して。生死のうづにおぼれまよふべし。かくのご
ときのいましめ。釈儒の二教よくよく説せり。禅
子の説にハ。人のかなしむべきはわが身の迷ひを知らずのま
ふかくしづんで世のつねにするかハち欲なりといふ。儒

者のをしへを。仁義と云も。仏のいましめも。心を
これらもとゞむ。ぞくぶ欲をとゞむるにして。他のをと
むさぼらんことを。戒とするべけれ。殆君上より
るをまもりごとぞかし。時ハ国乱れ。民くるしめり
但しいまゝに国位をうばひとらんがため。天下を乱し。
黎民をなやまして。悲ぞみのうへ天神七代地神
五代去て。神武帝よりこのかた。日本国ハ王土也。
民ハ子のごとく。王位の政をこそまもれ。時ハ国民
安穏にして。風枝をならさず。雨つちくれをやぶ
らず。是天よりわたす所の聖人なるがゆゑ也。

荘士は君は民をもつて子とし民ハ君をもつて父
ごとくにぞ。然るに神功皇后女帝の御力をもつて。
ひとつの国をうちしたがへんと欲織によりし。海
織ハ母なりけるにて異国へ渡海し。他国の数ひを
なして所の御心をせられしがなだめ給ひて懐
妊よわりてせまりて玉ふ御腹されしかば大めして。おのよろ
ひのうへにこそ腹はとよへじとにて。絢猶を
もつて腹をとくしてたまふ此例によりて日本の武士。
腸猶をもちはいこれなり万里表派の上馬に
うへそぎまくさなし海中の藻とわくるものなり。

抑神明の草と名付けらる。神馬藻と書くなりとぞ
さしも。此時よりとこそ皇后三韓をとりたまひてぞへひ
られんとすぐれたる給ひしかれ大万里のみちのりの兵糧米
運送ありし日本国の民百姓まで。是によりてかけさ
かなしびたまひけるとて画まとへりしとぞ。元暦二年
安徳天皇同女院も海賊し給ひしより。長門国赤間が
関の海上によりて。源氏へ八百余艘。平家へ又百余艘
とうちめ合戦す。平氏討負先帝も二位尼上も。
ひとつに海底にしづめ給ふ。此源平を助るは上一人
の欲織なり下万民うらみて国をもとめて史記にいへる。

鉤をぬすむ者ハ誅せられ国を竊む者ハ侯となると
いへり鉤ハ帯に付るかきがね也。ぜに〳〵小盗ハ恥るといへ
ども大盗ハ国をぬすむとも恥辱になさずといへり。伊
尹ハ三皇五帝の世を治め給ふ事。天地のごとく計ひ。
政すれバなりかるがゆへに。堯王位に即給ひて民の辰に
をかへさいてんけつしかれども。こうしとくと云。
とうやうそうさ。牧木を作りしも。ぶ木世にしやうぞ
めし。政をも付ども。民を様ぐ国土豊にとの政事也
されバ今の世までも堯とバ聞え。天下を
治むるも。さらにそれ〳〵世ハ仁義をもつてたりて

且それ人として仁義の道にそむくハ。なげきにあらずや。然
して大ねがひをいだくとや。そもそも生涯にのぞむ九義の
為に守ると大ねとも。終に古語に敵のいきほひを言で
もなきことを是もとと云く。武頭胡ひがらし。越王会稽
の恥をすゝぐ一眼の亀の浮木にあへるがごとし
し武頭ねがひでまいりて越王の口舌尿の臭をなめ
代までも名をのこしけれ。ほんご国を守護ありし。滅
国となりしも犬ねの武運にあらず天命のなせる也。
既に合戦の勝負ハ負たりとても恥辱にあらずべし
をのつから運と天にまかせ義を重じ後代に

名誉を残さんこそ丈夫の本懐なるべけれ。右衛
門の二字は付くの子細なり。字面にかかはる事なり。
ちがふ事あれバ一概に定がたし。筑紫宰府の栗ハ名物
なりしを御門へさゝぐ。毎年に二度なる栗
栗也。されバこそ栗と名付侍るよ
はくし人よくとりわけて栗の種ゟハなる
で栄ふことなれと諸国の所よりすぐれ人ハ
あへてあけてうとましきをかすなるべし秘伝よ
常に為しなんべきさなるにおかかりてもまとハ
もぢれへより俗にいひつらんぞ残りとけれ

徒事なれどかくて益なしことなり
○人名題号に於て誤る事
凡しをもりし。関東の百姓町人へ善之丞兵庫助
大学なんど紛らハ名を付たる縁にも次郎関東
諸国みだれ弓矢ゆくえでうる白秋てなんと也
いう為しなる百姓町人も外のほさお鑓のこと
今行徒一体りとねバなし。中田も男どある者為
一疋網とこもを敵にしと云べ鑓をいうくのどもせよ
でも家出しもちうして弥氣と見とわらそし国の
用にたゝしかりやこも名とこうじる人もなかりし

扨又いふ人は哥をよミても云義を名付たる人
也。新古今なり
鶯ひは更も滝の数うけばおもしろけれの
鳥のとのほど俳諧しくなれば鶯しとの俳諧と名
付給ひけるよし素人
抑うちは也。素人がいひなん鳥の音の声とうしも
手がらがましかるんと御しもちの素人と云俳諧
也又さびりうじられば俳とこふ哉。流も初
音のぐちうそもとれど詠じそうられむ初音の
俳諧とぞいふる。苦人は哥ゆへうを座さうしき名

なるよむ俳諧ひね。人丸の家丸門しも柿の木ちとゆへ。
柿本人丸と名付。赤人は山邊と云所にて生し
人なれば山邊の赤人といふとや。名は號号よ
わたりけるといふ。古人のことぞ。おりひとつれをる
至今江戸の町人は家名といひて我生れ所の
國郡在名を付て當世の風流ともは名も時代
よそてうりうとしもとれるりこそ人は山月と云
人やうて。國郡在名と町人名家さうの抱をも志
らすど関東よ。伊達孫佐竹孫。武上孫南のを
かしうは在名を名付給ひを関東ゐかくれ

かの紀氏名字あるゆへなりと云。我也又そこに是義な
らば、杉町人名字くるしかるまじ。天下の
名字多くましませど、御門を。嵯峨天皇・伏見
院・深草院・後深草院の御門など申奉るにより。
帝王の御名と号しければ、後には所々の名を町
人まで付るといへども、ゆるしたるものなし。正月也そ
後此義とがむる事も子細なき方へ也。人の三
浦にあつく出る又左兵衛門と云しが、今江戸へ
来て三浦又左兵衛と名付、三浦名字由
来なくして名字を付る事。過怠也と。

也不義としらざるなり。されば古人も我志しけるを
をも子細をしらずして人に問ねば、かならず過をかさぬ
益なしといへり。猶又志て行なふをば、とぐとせよと。
孔子も子路をいさめ給ひそれ。然るにそれがし。三
浦と名字事はいまだたゞさゞりしもあまりに。むかし
相模の国三浦の郡、新井といふ所に。三浦介道
寸陸奥守義同法名道寸と号し、文武の名将有
里が北条早雲に弓矢を取。鎌倉合戦に道寸
討負敗北し。新井の城に三年籠もると
いへども、永正十五戊寅の年七月十一日にせめおと

されば十寸切腹し給ひぬ。是内藤それがしたりけるなり
にあつし左衛門尉義忠。三崎の城にありしが二郎の者
たのみがたく舟にて三崎城ヶ島へ渡り舟を悉
島にあつめてぞありける早雲三崎へよせ来て城を島
近く見えしかれど海をへだてければ船一艘もなし
是によせ手ひたさわぎける。鎌倉の者どもに舟を
漕出し相模浦々の在所へおしかけて海上へ早雲
のせけるにぞ鎌倉建長寺。延覚寺両禅
寺船の衆人ひきしく出合ひけれは義忠とけ
也生きて里へ三崎の名字の中にし

ち十人早雲幕下に属しそれにより三浦十人
衆と号し前々のごとく三崎にて在城し早雲より
里知りとて三崎迄をくれて二所まかせてとらかる
かくて後小田原氏康公の男北条氏規天正
年中に三浦をしりしたがひけれは十人衆の田地
をそのまゝ其後も三浦十人衆と号し一役を
流とめ来るによって三浦十人衆の田地と名
付一名引分て今にあり。是末代までも抜
里とよぶなり。此地也。然るに先年小田原氏直没
落以後家康公御代官として長谷川七兵

悪射為。三浦へ打入。三浦へ来り猶ふ。是初三
浦十人衆ハ七左衛門為乃百姓ふ成く。昔
よりが田地乃ゑもしと仰るが。力命下とゑらく
さく様それがし田畠を仰るとて人たが力とや
しるひ亀わまれ門さ人此年寅の未全なるく。
せそぐふ。往代左へ嘉子と引こしまんとせ。
此大切乃未全を治納し。江戸繁昌乃ちまる
なれバ当地江戸へ来る町よ。知人へゑる三浦
又郎左衛とよんぐ。何事そとあるふ。何か
ぐちふ拝がひりしめをとて人たく此名とぶ。

古語よ。名へ義ふ寄くるがせとさく。それで何とすも
道理よ背ぬとりそせう。されバ治世の年ま
将公乃万人とし。三浦衣笠乃城りして。討死せし
三浦大介義明ハ里や八十九くを年まで三浦
ふるく。三浦と名字人。三浦介道寸是投し
それより早雲このうし。氏直公同代まで三浦
ふ住して。三浦乃十人衆と。三浦と名字の家の
名字それがし一報の外よるべくもむ。然とさん
むかハやしるがし。三浦と名字くも苦し
かるまじさる是義ハ此の下りしさふ寄てがふ

こそあれ。検見の人にも叶ひ侍る者なり。

○関八州の升に大小ある事

むかしハ昔升もちゐし事。大宝二年壬午の年斗升を作り。帝より諸国へ下されて事古記に見えて。それより後又慶雲二乙巳年。文武の御宇ニ又も斗升を作りたまふ。されバいにしへ関東にて升に大小ありて伊豆相模にハ京升ごとく。京升より大なる升を作りたまふ。武蔵よりひがしの国ハ大升ごとく。升の寸法にまけをつけ。一俵に三升ハ又升ハ一斗への

升わり。国々在々所々にて升ちがひ。然るに民康時代より乱れて。関八州の升。一升升よりおほくなるためらるべき自分の升にて百姓たち難儀のおほくなりしより見るべき趣。訴訟しに付て。御止らる。武蔵。上総ハ大くしても京升也。分の升北條氏政時代まで。安藤升を前升と云者作里也と乱りに安藤升を名付。伊勢小田原諸こいふ者。安藤升の大小を改めきを料りに依て。天正十二年十月。小田原北条子河原なり。まてものかたけられたり。されバ安藤升て

前事は関八州の代官と二人して沙汰しける世に
あしく相模才智にして二つともに司と承りし。
家とみえてかうしことをさゝる。権家の者とても
なりしかせり。御すで関八州をとくてこそといへば伊
豆の国三嶋。武蔵の大宮あるはあまた後り出
まて一年に小除民役所代。十二月より正月大小
相違あるまじの陰陽師をめしよせ。さら此義を
作為したえ。北辺輪りよび渡しかてける
か元日の御祝いにまかりにしかじ安房をて
前事も斯乃ならんれば若此義をしてる事も

前事たんと作為りかりし。其前事ありていへる
暦は須弥の四州をさめさる。須弥山のあるさ。八
万四千由旬也。三十里を一由旬と名付てり。日月
のめぐりとりて四季とわかち。支干を定め。三
千世界とそれまで海よなくして。帆くれ
かかつてはすべて是算として知り得る。伴
の算と云は。天竺国世自在王の作ぞより
おしまる子細のべ置とぞいへども。我朝へ算
伝る事なくりんさ二十一年十二月八日。伊豆の三嶋
亀ヶ亀とひて神のご八北ぱ此義知へなし并暦

めぐりをなし。是を宮寺(ぐうじ)に納(おさめ)おく。是を後
新羅国(しんらこく)より人の来翁(ひらうわう)二島(しま)へ来り。此算(さん)をつたへ
し。これを取り出す。日本国へ是といろは算と
名付るは本末にて定方ならば上下九かけに是を
えらぶ。九々八十一の極数(ごくすう)に数(へう)を立る法也。是を陰陽(いんやう)
の理とし天地和合(てんちわがう)。さうしやうじやうとおもしきゆく
と。りつ抱みしてこれを取り出せり。是はじめ
葛井(かさゐ)のりともわかる安部(あべ)の晴明(せいめい)か事ども也。
道満(どうまん)がことゞもろ伴(ぐばん)の二人は花山院(くはさんのゐん)の御宇(ぎよう)の
陰陽師(いんやうし)也。又弘法(こうぼう)の事ともわかり。秘術(ひじゆつ)を

とへたとへば心(こゝろ)は一味(み)にまかせの神秘(じんぴ)。それぞれは
一事に極まり。蔵主(ざうす)大命(めい)辞(じ)しがたしとて此
清(け)和(く)にも極(きよく)めて因(いん)に引籠(ひきこも)りて武義をせん
さし。果(はて)て見えず。三路(みち)のことに相違もなし是
おもて。三路の暦(こよみ)と見ひ路へて元日(ぐわんじつ)の吉凶(けいが)
とのべ路ひ極又小田原繁昌の時節(じせつ)ぶ前(ぜん)の
守(しゆ)朋友(ほうゆう)に路(みち)ていくる民怨春杉院と名付こ
のまゝ三人の目とまわるとわまざか除家(け)の民
星(え)名りしこいとし人々は不思議(ふしぎ)にさん
流(る)をそれより三代目(ぞい)に家(わさ)民座時代に

織毛し給ひねばとて今ありてさらば合せたりけり
田原没落以後。家康公武州江戸へ御打入の節。
兵部とも名付くるなどを四方の上なるにあり。
此をさ判をく用ひ。是にとて昔の関東升。
皆するありとこれは従起に入部門の後代に至とて
まとめて升の大小からとひとり。楚国には四方統
を流ひとりいふ六斛四斗への升わり。決して此
是をる大升なり。仲由と云人。粟一万鍾を流
せとふくかくのごとく紀の升かりとくや。相又元和
年中。秀忠公の御時代にいたりて。十合への升
と天下にとて用ひ是を続けてと名付は江戸
町の年寄。樽屋と云者に升付し是を紀ち
てせさとて四方の上からおくろうひとさせ御用に
是す之へ続と申して問にみせ升に定るの。焼印
打て。六十余州あまねく此一升を流わたし升升に
大小を流わたる者をちまち死罪にてとこかりける。漢
土にもさ係そとめしわり揆悪の者あて升の是
と二重にへ。市町あまねく小升を流わたる人是を
ちりとて天雷ありて門にてあそちまち地こと事力とさく。
市中の人集て是とおかるみせあるに二口日月

八三といふ文字あり。是をとく事を得ず。篆に人々よく此字の上に。又一点を加へて子細を見んなりと。市中用小計とよめり。それより諸人に計を用ゆる事。天道とかくされしと也。計のいましめ漢和ともなしとぞ

北條五代記巻第九終